

教皇日本司牧訪問全テキスト

★日本の司教団との会談教皇の講話

東京、2019年11月23日

愛する兄弟である、司教の皆さん。

はじめに、ごあいさつせずに入ってきてごめんなさい。わたしたちアルゼンチン人は本当失礼ですね！ すみません。皆さんとご一緒できてうれしいです。日本人は几帳面で働き者であることはよく知られていますが、それを目の当たりにしました。飛行機から教皇が降りると、すぐに動いてくれましたね。ありがとうございます。

日本訪問という恵みと、皆様の歓迎にとても感謝しています。日本のすべてのカトリック共同体を代表された、高見大司教様のおことばにとくに感謝いたします。司教様がたとの、この最初の公的な会談の場をお借りして、皆さんのそれぞれの共同体、そして共同体全体に、信徒、カテキスタ、司祭、修道者、奉獻生活者、神学生に、ごあいさつしたいと思います。また、新しい天皇の即位と、令和という新しい時代の幕開けという画期におられる、日本のすべてのかたにも、ごあいさつと祈りをお届けしたく思います。

ご存じかどうか分かりませんが、わたしは若いときから日本に共感と愛着を抱いてきました。日本への宣教の望みを覚えてから長い時間が経ち、ようやくそれが実現しました。今日、主はわたしに、皆さんと同席するという機会を与えてくださいました。わたしは信仰の偉大な証人の足跡をたどる、宣教する巡礼者としてここにおります。聖フランシスコ・ザビエルが日本に上陸してから470年が経ちます。ザビエルが、日本におけるキリスト教布教を始めました。彼を思い出しながら、皆様と心を合わせて主に感謝したいと思います。その感謝は、その後何世紀にもわたって福音の種を蒔き、熱意と愛をもって日本の人々に奉仕した、すべての人への感謝です。その献身が、日本の教会に独特の性格を与えました。わたしは、聖パウロ三木と同志殉教者、また、数知れない試練の中で死に至るまで信仰をあかした福者高山右近のことを思い出します。迫害の中で信仰を守ろうとするこの献身のおかげで、小さなキリスト教共同体は成長し、堅固になり、豊かな実りを生みました。さらに、長崎の「潜伏キリシタン」のことも思い浮かべてみましょう。彼らは洗礼と祈りと要理教育を通して、何世代にもわたって信仰を守ってきました。それは、その地に輝く真の家庭教会でした。当人たちは意識せずとも、ナザレの聖家族を映し出していたのです。

主の道は、神を忘れまいと努める忠実な民の日常生活の中で、ご自分がいかに「働かれる」かを示しています。沈黙の中に隠れておられますが、聖霊の力と優しさをもって、二人またはそれ以上が、主の名において集まるところには主がおられる（マタイ18・20参照）ということをお出ししてくれる、生きた記憶です。あなたがたの共同体のDNAには、このあかしが刻まれています。それはあらゆる絶望に対する特効薬で、目を

上げて歩むべき道を示してくれます。皆さんは、迫害の中で主のみ名を呼び続け、主が
いかに自分たちを導かれたかを見つめてきた、生きている教会です。

希望に燃えた種蒔き、殉教者のあかし、時が来れば神が与えてくださるはずの実りを
待つ忍耐、これらが、日本の文化と共存できた宣教方法を特徴づけたものです。その結
果、長い年月を経て、教会の顔が形づくられました。教会は総じて、日本社会からとて
も評価されています。それは、教会が共通善のために多くの貢献をなしたからです。日
本の歴史と普遍教会の歴史の中で重要なあの時代は、長崎と天草地方の教会と集落群が
世界遺産に登録されたことでも認められています。ですが何より、皆さんの共同体の魂
の生きる記憶として、あらゆる福音宣教の豊かな希望として、評価されるものです。

この司牧訪問のテーマは、「すべてのいのちを守るため」です。それは、わたしたち
司教の奉仕職というものをよく表しています。司教とは、主によってその民の中から呼
び出され、すべてのいのちを守ることのできる牧者として民に渡される者です。このこ
とは、わたしたちが目指すべき現場をある程度決定してくれます。

この国での宣教は、インカルチュレーションと対話を希求するという点が特徴的でした。
これによって、西欧で発展したものに対し、新しく独自の数々の様式が展開できた
のです。周知のことですが、初期のころから、書物、演劇、音楽、あらゆる教材におい
て、ほとんど日本語が使われました。この事実は、初代の宣教師が日本に対して抱いた
愛情を示しています。すべてのいのちを守るとは、まず、この愛のこもった寛大な目も
って、神からゆだねられた民すべてのいのちを愛し、何よりも、この民を神から受け
たたまものとして認めることです。「愛されるだけで救われるからです。すぎるだけで
変えていただけるのです」【1】。これは、効果はあるものの副次的な別の考えではな
く、すべてのいのちは無償の恵みだという姿勢をとる助けとなる、具体的な行動規範で
す。すべてのいのちを守ることと福音を告げることは、切り離された別のものではなく、
また相反するものでもありません。互いに呼び寄せ合い、必要とし合っています。どち
らも、今日この国で、イエスの福音の光に照らされた信じる民の全人的発展を妨げうる
ものに、注意を怠らず警戒することを意味します。

日本の教会は小さく、カトリック信者が少数派であることは知っています。しかし、
それが、あなたたちの福音宣教の熱意を冷ますようではいけません。皆さんに固有な状
況において、人々に示すべきもっとも強く明白なことばは、普段の生活の中での目立た
ぬあかしと、他の宗教的伝統との対話です。日本のカトリック信者の半数以上を占める
多数の外国人労働者を親切に受け入れ世話することは、日本社会の中で福音のあかしと
なるだけでなく、教会があらゆる人に開かれていることの証明にもなります。わたした
ちのキリストとのきずなは、他のどんな結びつきやアイデンティティよりも強く、あ
らゆる現実のもとに届き触れうるものであることを示すからです。

殉教者の教会は、何でも率直に話すことができます。とくに、この世界の平和と正義
という緊急の課題に取り組む際にはなおさらです。わたしはすぐに、長崎と広島を訪問

いたします。そこで、この二つの町の被爆者のために祈ります。また、核兵器廃絶への皆さんの預言的ともいえる呼びかけに、わたしも同調を表明したく思います。人類史に残るあの悲劇の傷に、今なお苦しんでいる人々、また「〔地震、津波、原発事故という〕三重の災害」の犠牲者のかたがたにもお会いしたいと思っています。長期にわたる彼らの苦しみをみると、人として、そしてキリスト信者として、わたしたちに課された義務をはっきり自覚させられます。身体や心に苦しみを抱えている人を助け、希望と治癒と和解という福音のメッセージを、すべての人に伝えるという義務です。災害は人を選びませんし、身分も問いません。ただ、その激しい破壊力をもって襲いかかります。多くの人命を奪い甚大な損害をもたらした先日の台風もそうです。亡くなったかたがたとそのご家族、自宅や家や財産を失ったすべての人を、主のいつくしみにゆだねましょう。日本で、そして世界中で、あらゆるいのちを神からのかけがえのないたまものとして守るために、臆することなく声を上げていく使命を果たせますように。

皆さんを励ましたいと思います。日本のカトリック共同体の、社会全体の中での福音の明快なあかし、それを確実にするよう努力を続けてください。信頼を得ている教会の教育事業は、福音宣教の有効な手段であり、非常に幅広い知的・文化的潮流に寄与しています。貢献の質は、当然のことながら、そのアイデンティティと使命とを、どれだけもり立てるかにかかっています。

わたしたちは、日本の共同体に属する一部の人のいのちを脅かす、さまざまな厄介ごとがあることを自覚しています。それらは、いろいろな理由によるものの、孤独、絶望、孤立が際立っています。この国での自殺者やいじめの増加、自分を攻めてしまうさまざまな事態は、新たな形態の疎外と心の混迷を生んでいます。それがどれほど人々を、なかでも、若い人たちを苛んでいることでしょうか。皆さんにお願いします。若者と彼らの困難に、とくに配慮してください。有能さと生産性と成功のみを求める文化に、無償で無私の愛の文化が、「成功した」人だけでなくどの人にも幸福で充実した生活の可能性を差し出せる文化が、取って変わるよう努めてください。日本の若者は、自分たちの熱意とアイデアと力をもって、またよい教育と周囲のよい助けを得て、同時代の仲間にとって大切な希望の源となり、キリストの愛を生き生きとあかしする生きた証人となることができます。ケリグマ（福音の告知）を創造的に、文化に根ざした、創意に富んだしかたで行うなら、それは理解を求めている大勢の人に強く響くでしょう。

収穫は多いけれども働く人は少ないことを知っています。だからこそ、皆さんを励ましたいのです。家庭を巻き込む宣教のしかたを考え、生み出し、促すことです。またつねに現実を直視しつつ、人々がいる場にまで届くような養成を促進することです。どんな使徒職の出発点も、人々が普段の生活をしている、その場から生まれます。その場所に、つまり、町中や仕事場、大学の中にいる人々のもとにまで行って、思いやりとあわれみの福音を携え、わたしたちに任された信者たちに寄り添わなければならないのです。

皆さんの教会を訪問し、ともに祭儀を行う機会をくださったことに、あらためて感謝いたします。ペトロの後継者は、日本の教会の信仰を強めたいと思っていますが、同時にまた、信仰をあかした多くの殉教者の足跡に触れ、自分の信仰をも新たにしたいと思っています。主がこの恵みをわたしに与えてくださるようお祈りください。

主が皆さんと、皆さんを通して、それぞれの共同体を祝福してくださるよう祈ります。どうもありがとう。

注

1. 教皇フランシスコ「WYD パナマ大会晩の祈りでの講話（2019年1月26日）」

★長崎 爆心地公園での教皇スピーチ

核兵器についてのメッセージ

長崎・爆心地公園

2019年11月24日

愛する兄弟姉妹の皆さん。

この場所は、わたしたち人間が過ちを犯しうる存在であるということ、悲しみと恐れとともに意識させてくれます。近年、浦上教会で見いだされた被爆十字架とマリア像は、被爆なされたかたとそのご家族が生身の身体に受けられた筆舌に尽くしがたい苦しみを、あらためて思い起こさせてくれます。

人の心にあるもっとも深い望みの一つは、平和と安定への望みです。核兵器や大量破壊兵器を所有することは、この望みへの最良のこたえではありません。それどころか、この望みをたえず試みにさらすことになるのです。わたしたちの世界は、手に負えない分裂の中にあります。それは、恐怖と相互不信を土台とした偽りの確かさの上に平和と安全を築き、確かなものにしようという解決策です。人と人の関係をむしばみ、相互の対話を阻んでしまうものです。

国際的な平和と安定は、相互破壊への不安や、壊滅の脅威を土台とした、どんな企てとも相いれないものです。むしろ、現在と未来のすべての人類家族が共有する相互尊重と奉仕への協力と連帯という、世界的な倫理によってのみ実現可能となります。

ここは、核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町です。そして、軍備拡張競争に反対する声は、小さくともつねに上がっています。軍備拡張競争

争は、貴重な資源の無駄遣いです。本来それは、人々の全人的発展と自然環境の保全に使われるべきものです。今日の世界では、何百万という子どもや家族が、人間以下の生活を強いられています。しかし、武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは途方もないテロ行為です。

核兵器から解放された平和な世界。それは、あらゆる場所で、数え切れないほどの人が熱望していることです。この理想を実現するには、すべての人の参加が必要です。個人、宗教団体、市民社会、核兵器保有国も、非保有国も、軍隊も民間も、国際機関もそうです。核兵器の脅威に対しては、一致団結して応じなくてはなりません。それは、現今の世界を覆う不信の流れを打ち壊す、困難ながらも堅固な構造を土台とした、相互の信頼に基づくものです。1963年に聖ヨハネ23世教皇は、回勅『地上の平和（パーチェム・イン・テリス）』で核兵器の禁止を世界に訴えています（112番 [邦訳60番] 参照）、そこではこう断言してもいます。「軍備の均衡が平和の条件であるという理解を、真の平和は相互の信頼の上になら構築できないという原則に置き換える必要があります」（113番 [邦訳61番]）。

今、拡大しつつある、相互不信の流れを壊さなくてはなりません。相互不信によって、兵器使用を制限する国際的な枠組みが崩壊する危険があります。わたしたちは、多国籍主義の衰退を目の当たりにしています。それは、兵器の技術革新にあってさらに危険なことです。この指摘は、相互の結びつきを特徴とする現今の情勢から見ると的を射ていないように見えるかもしれませんが、あらゆる国の指導者が緊急に注意を払うだけでなく、力を注ぎ込むべき点なのです。

カトリック教会としては、人々と国家間の平和の実現に向けて不退転の決意を固めています。それは、神に対し、そしてこの地上のあらゆる人に対する責務なのです。核兵器禁止条約を含め、核軍縮と核不拡散に関する主要な国際的な法的原則に則り、飽くことなく、迅速に行動し、訴えていくことでしょう。昨年7月、日本司教協議会は、核兵器廃絶の呼びかけを行いました。また、日本の教会では毎年8月に、平和に向けた10日間の平和旬間を行っています。どうか、祈り、一致の促進の飽くなき探求、対話への粘り強い招きが、わたしたちが信を置く「武器」でありますように。また、平和を真に保証する、正義と連帯のある世界を築く取り組みを鼓舞するものとなりますように。

核兵器のない世界が可能であり必要であるという確信をもって、政治をつかさどる指導者の皆さんにお願いします。核兵器は、今日の国際的また国家の、安全保障への脅威からわたしたちを守ってくれるものではない、そう心に刻んでください。人道のおよび環境の観点から、核兵器の使用がもたらす壊滅的な破壊を考えなくてはなりません。核の

理論によって促される、恐れ、不信、敵意の増幅を止めなければなりません。今の地球の状態から見ると、その資源がどのように使われるのかを真剣に考察することが必要です。複雑で困難な持続可能な開発のための2030アジェンダの達成、すなわち人類の全人的発展という目的を達成するためにも、真剣に考察しなくてはなりません。1964年に、すでに教皇聖パウロ6世は、防衛費の一部から世界基金を創設し、貧しい人々の援助に充てることを提案しています（「ムンバイでの報道記者へのスピーチ（1964年12月4日）」）。回勅『ポプロールム・プログレッシオ（1967年3月26日）』参照）。

こういったことすべてのために、信頼関係と相互の発展とを確かなものとするための構造を作り上げ、状況に対応できる指導者たちの協力を得ることが、きわめて重要です。責務には、わたしたち皆がかかわっていますし、全員が必要とされています。今日、わたしたちが心を痛めている何百万という人の苦しみに、無関心でいてよい人はいません。傷の痛みを叫ぶ兄弟の声に耳を塞いでよい人はどこにもいません。対話することのできない文化による破滅を前に目を閉ざしてよい人はどこにもいません。

心を改めることができるよう、また、いのちの文化、ゆるしの文化、兄弟愛の文化が勝利を収めるよう、毎日心をつにして祈ってくださるようお願いいたします。共通の目的地を目指す中で、相互の違いを認め保証する兄弟愛です。

ここにおられる皆さんの中には、カトリック信者でないかたもおられることでしょう。でも、アッシジの聖フランシスコに由来する平和を求める祈りは、私たち全員の祈りとなると確信しています。

主よ、わたしをあなたの平和の道具としてください。

憎しみがあるところに愛を、

いさかいがあるところにゆるしを、

疑いのあるところに信仰を、

絶望があるところに希望を、

闇に光を、

悲しみあるところに喜びをもたらすものとしてください。

記憶にとどめるこの場所、それはわたしたちをハッとさせ、無関心でいることを許さないだけでなく、神にもと信頼を寄せるよう促してくれます。また、わたしたちが真の平和の道具となって働くよう勧めてくれています。過去と同じ過ちを犯さないためにも勧めているのです。

皆さんとご家族、そして、全国民が、繁栄と社会の和の恵みを享受できますようお祈りいたします。

★殉教者への表敬――殉教の記念碑教皇のスピーチ

西坂の丘

2019年11月24日、長崎

愛する兄弟姉妹の皆さん、こんにちは。

わたしはこの瞬間を待ちわびていました。わたしは一巡礼者として祈るため、信仰を確かめるため、また自らのあかしと献身で道を示すこの兄弟たちの信仰に強められるために来ました。歓迎に心から感謝いたします。

この聖地にいると、はるか昔に殉教したキリスト者の姿と名が浮かんできます。1597年2月5日に殉教したパウロ三木と同志殉教者をはじめ、その苦しみと死によってこの地を聖なる地とした、あまたの殉教者です。

しかしながら、この聖地は死についてよりも、いのちの勝利について語りかけます。聖ヨハネ・パウロ2世はこの地を、殉教者の丘としてだけでなく、まことの真福八端の山と考えました。自己中心、安穩、虚栄から解き放たれ、聖霊に満たされた人々のあかしに触れることができる場です（使徒的勧告『喜びに喜べ』65参照）。ここで、迫害と剣に打ち勝った愛のうちに、福音の光が輝いたからです。

ここは何よりも復活を告げる場所です。襲いくるあらゆる試練の中でも、最後は死ではなく、いのちに至ると宣言しているからです。わたしたちは死ではなく、完全な神のいのちに向かって呼ばれているのです。彼らは、そのことを告げ知らせたのです。確かにここには、死と殉教の闇があります。ですが同時に、復活の光も告げ知らされています。殉教者の血は、イエス・キリストがすべての人に、わたしたち皆に与えたいと望む、新しいいのちの種となりました。そのあかしは、宣教する弟子として生きるわたしたちの信仰を強め、献身と決意を新たにします。日々黙々と務める働きによる「殉教」を通して、すべてのいのち、とくにもっとも助けを必要としている人を保護し守る文化のために働く弟子として。

わたしが殉教者にささげられた記念碑の前まで来たのは、このような聖なる人々と会うためです。「地の果て」に生まれた若いイエズス会士の謙虚さに心を重ね、最初の宣教師と日本の殉教者の歴史に、靈感と刷新の深い泉を見いだしたかったのです。すべてをささげた彼の愛を忘れないようにしましょう。記念館に丁重に納められ尊ばれる過去の手柄の輝かしい遺物にとどまるのではなく、その愛が、福音宣教の熱い思いを刷新し

絶えることなく燃え立たせる、この地におけるすべての使徒的精神の、生き生きとした記憶と燃える熱意になりますように。今の日本にある教会が、すべての困難と展望を含め、十字架の上から放たれた聖パウロ三木のメッセージに日々耳を傾け、道、真理、いのち（ヨハネ 14・6 参照）である福音の喜びと美をすべての人と分かち合うよう招かれていることを感じますように。わたしたちに重くのしかかり、謙遜に、自由に、大胆に、思いやりをもって歩むことを妨げるものから、日々解き放たれますように。

兄弟姉妹の皆さん。この場所から、世界のさまざまな場所で、信仰ゆえに今日も苦しみ、殉教の苦しみを味わうキリスト者とも心を合わせましょう。21世紀の殉教者たちは、そのあかしをもって、勇気をもって真福八端の道を自分のものとするようわたしたちに求めています。彼らのために、彼らとともに祈りましょう。そして、すべての人に、世界の隅々に至るまで、信教の自由が保障されるよう声を上げましょう。また、宗教の名を使ったすべての不正に対しても声を上げましょう。「人間の行動と人類の運命を誘導する全体支配主義と分断を掲げる政略、度を越えた利益追求システム、憎悪に拍車をかけるイデオロギー」（「人類の兄弟愛に関する共同文書（2019年2月4日、アブダビ）」）に対して。

わたしたちの母、殉教者の元后に、そして自らのいのちをもって主のすばらしさをあかしした聖パウロ三木と同志殉教者たちすべてに願いましょう。彼らの献身が、宣教の喜びを呼び覚まし保つことができるよう、皆さんの国、そして教会全体のために、取り次いでくれますように。

★王であるキリストの祭日のミサ教皇の説教

長崎県営球場（長崎ビック N スタジアム）

2019年11月24日、長崎

「イエスよ、あなたのみ国においでになるときには、わたしを思い出してください」（ルカ 23・42）

典礼暦最後の主日の今日、イエスとともに十字架につけられ、イエスが王だと気づき、そう宣言した犯罪人の声に、わたしたちも声を合わせます。栄光と勝利には程遠いそのときに、嘲笑と侮辱の声高な叫びの中で、あの盗人は声を上げ、信仰を宣言しました。それは、イエスが聞いた最後のことばであり、御父にご自分をゆだねる前、イエスは最後にいいました。「はっきりいっておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（ルカ 23・43）。盗人の後ろ暗い過去は、一瞬にして新たな意味を得たかのようです。すなわち、主の苦悶にしっかりと寄り添い、いつでもどこにおいても救いを差し出すという主の生き方を確かめるものとしたのです。カルワリオ、それは無秩序と不正義の

場、無力と無理解が相まみえ、罪なき者の死の前で、いつも茶化している者たちの、無関心で自己を正当化する、ささやきと陰口が響く場です。カルワリオ、この語は、この悔い改めた盗人の姿勢によって、全人類にとっての希望という語に変わるのです。苦しむ罪なき人への自分自身を救えというあざけりやわめき声は、決めぜりふにはならず、むしろ、歴史を作るまことの形として、心を動かされるに任せ、いつくしみによって決断する者たちの声を呼び起こすのです。

今日ここで、わたしたちの信仰と約束を新たにしたいと思います。あの悔い改めた盗人と同じく、わたしたちは、失敗、罪、限界ばかりの人生をよく分かっています。けれどもそれが、わたしたちの現在と未来を既定し、決定づけるものであってほしくありません。わたしたちは、「自分自身を救ってみろ」という軽々しい無関心の声で、面倒を避ける空気に染まりがちなことを知っています。多くの罪なき者の苦しみを、ともに背負うことの大切さを忘れてしまうことも少なくありません。この国は、人間が手にしうる壊滅的な力を経験した数少ない国の一つです。ですからわたしたちは、悔い改めた盗人と同じように、苦しむ罪なきかた、主イエスを弁護し仕えるために、声を上げ、信仰を表明する瞬間を生きたいのです。主の苦しみに寄り添い、その孤独と放棄を支えたいと思います。そして今一度、救いそのものである、御父がわたしたち皆に届けようとするあのことばを聞きましょう。「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」。

救いと確信——。それは、聖パウロ三木と同志殉教者、そしてあなたがたの霊的遺産に刻まれた無数の殉教者、彼らがそのいのちをもって勇猛にあかしてきてきたものです。わたしたちは彼らの足跡に従い、その一步一步を同じように、勇気を携えて歩みたいと思います。十字架上のキリストから与えられ、渡され、約束された愛こそが、あらゆるたぐいの憎しみ、利己心、嘲笑、言い逃れを打ち破るのです。そこに、よい行動や選択を前にして身をすくませる、無意味な悲観主義や、感覚を鈍らせる物的豊かさに、ことごとく勝利する力があります。第二バチカン公会議は、そのことを思い出させてくれました。真理から遠いのは、この世には永遠の都はないといって、来る都を探し求めているつもりで地上での務めをないがしろにし、注意を怠る人です。まさに、告白する同じ信仰で、神に呼ばれた召し出しの崇高さを示し、それが透けて見えるほどにすべきなのです（第2バチカン公会議『現代世界憲章』43参照）。

わたしたちの信仰は、生きる者たちの神への信仰なのです。キリストは生きておられ、わたしたちの間で働かれ、わたしたち皆をいのちの充満へと導いておられます。キリストは生きておられ、わたしたちに生きる者であってほしいと願っておられるのです。キリストはわたしたちの希望です（使徒的勧告『キリストは生きている』1参照）。わたしたちは毎日こう祈っています。主よ、み国が来ますように。こう祈りながら、自分の生活と活動が、賛美となるよう願っています。宣教する弟子としての使命が、来るべきものの証言者や使者となることならば、わたしたちは、悪や悪行に身を任せてはられません。反対にその使命は、神の国のパン種になるよう駆り立てるのです。家庭、職場、

社会、どこであれ、置かれた場所でパン種となるよう駆り立てるのです。聖霊が人々の間に希望の風として吹き続けるための、小さな通気口となることです。天の国は、わたしたち皆の共通の目的地です。それは、将来のためだけの目標ではありません。それを請い願ひ、今日からそれを生きるのです。病気や障害のある人、高齢者や見捨てられた人たち、難民や外国からの労働者、彼らを取り囲んで大抵は黙らせる無関心の脇で、今日それを生きるのです。彼らは皆、わたしたちの王、キリストの生きる秘跡なのです（マタイ 25・31-46 参照）。なぜなら「もしわたしたちが本当にキリストの観想によって出発したのであれば、あのかたがご自分を重ねたいと望んだ人たちの顔に、あのかたの姿を見いださなければならぬ」（聖ヨハネ・パウロ 2 世使徒的書簡『新千年期の初めに』49）からです。

あの日、カルワリオでは、多くの人が口を閉ざしていました。他の大勢は嘲笑し、盗人の声だけがそれに逆らい、苦しむ罪なきかたを擁護できたのです。それは、勇気ある信仰宣言です。わたしたち一人ひとりが決断することです。沈黙か、嘲笑か、あるいは告げ知らせるか。親愛なる兄弟姉妹の皆さん。長崎はその魂に、いやしがたい傷を負っています。その傷は、多くの罪なき者の、筆舌に尽くしがたい苦しみによるしるしです。これまでの戦争によって踏みにじられた犠牲者たちは、さまざまな場所で勃発している第3次世界大戦によって、今日もなお苦しんでいます。今ここで、一つの祈りとして、わたしたちも声を上げましょう。今日、この恐ろしい罪を、身をもって苦しんでいるすべての人のために。そして、あの悔い改めた盗人のように、黙りも嘲笑もせず、むしろ、自ら声を上げ、真理と正義、聖性と恵み、愛と平和のみ国を告げ知らせる者が、もっともっと増えるよう願ひましょう。

★平和記念公園にて記帳メッセージ

2019年11月24日、広島

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19824/>

<Japanese>

わたしは平和の巡礼者として、この地の歴史の中にあるあの悲惨な日に、傷と死を被つ

たすべての人との連帯をもって悼むために参りました。

いのちの神が、（わたしたちの）心を、平和と、和解と、兄弟愛へと変えてくださるよう祈ります。

フランシスコ

2019年11月24日

<English>

I have come as a pilgrim of peace, to grieve in solidarity with all who suffered injury and death on that terrible day in the history of this land.

I pray that the God of life will convert hearts to peace, reconciliation and fraternal love.

Francis

24 11, 2019

★平和記念公園にて教皇のスピーチ

2019年11月24日、広島

「わたしはいおう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』」（詩編 122・8）。

あわれみの神、歴史の主よ、この場所から、わたしたちはあなたに目を向けます。死といのち、崩壊と再生、苦しみといつくしみの交差するこの場所から。

ここで、大勢の人が、その夢と希望が、一瞬の閃光と炎によって跡形もなく消され、影と沈黙だけが残りました。一瞬のうちに、すべてが破壊と死というブラックホールに飲み込まれました。その沈黙の淵から、亡き人々のすさまじい叫び声が、今なお聞こえてきます。さまざまな場所から集まり、それぞれの名をもち、なかには、異なる言語を話す人たちもいました。そのすべての人が、同じ運命によって、このおぞましい一瞬で結ばれたのです。その瞬間は、この国の歴史だけでなく、人類の顔に永遠に刻まれました。

この場所のすべての犠牲者を記憶にとどめます。また、あの時を生き延びたかたがたを前に、その強さと誇りに、深く敬意を表します。その後の長きにわたり、身体の激しい苦痛と、心の中の生きる力をむしばんでいく死の兆しを忍んでこられたからです。

わたしは平和の巡礼者として、この場所を訪れなければならないと感じていました。激しい暴力の犠牲となった罪のない人々を思い出し、現代社会の人々の願いと望みを胸にしつつ、じっと祈るためです。とくに、平和を望み、平和のために働き、平和のために自らを犠牲にする若者たちの願いと望みです。わたしは記憶と未来にあふれるこの場所に、貧しい人たちの叫びも携えて参りました。貧しい人々はいつの時代も、憎しみと対立の無防備な犠牲者だからです。

わたしはつつしんで、声を発しても耳を貸してもらえない人々の声になりたいと思います。現代社会が直面する増大した緊張状態を、不安と苦悩を抱えて見つめる人々の声です。それは、人類の共生を脅かす受け入れがたい不平等と不正義、わたしたちの共通の家を世話する能力の著しい欠如、また、あたかもそれで未来の平和が保障されるかのように行われる、継続的あるいは突発的な武力行使などに対する声です。

確信をもって、あらためて申し上げます。戦争のために原子力を使用することは、現代において、犯罪以外の何ものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、わたしたちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反します。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の保有は、それ自体が倫理に反しています。それは、わたしがすでに2年前に述べたとおりです。これについて、わたしたちは裁きを受けることとなります。次の世代の人々が、わたしたちの失態を裁く裁判官として立ち上がるでしょう。平和について話すだけで、国と国の間で何の行動も起こさなかったと。戦争のための最新鋭で強力な兵器を製造しながら、平和について話すことなどどうしてできるのでしょうか。差別と憎悪のスピーチで、あのだれもが知る偽りの行為を正当化しておきながら、どうして平和について話せるのでしょうか。

平和は、それが真理を基盤とし、正義に従って実現し、愛によって息づき完成され、自由において形成されないのであれば、単なる「発せられることば」に過ぎなくなると確信しています。（聖ヨハネ 23 世回勅『パーチェム・イン・テリス——地上の平和』37〔邦訳 20〕参照）。

真理と正義をもって平和を築くとは、「人間の間には、知識、徳、才能、物質的資力などの差がしばしば著しく存在する」（同上 87〔同 49〕）のを認めることです。ですから、自分だけの利益を求め、他者に何かを強いることが正当化されてよいはずはありません。その逆に、差の存在を認めることは、いっそうの責任と敬意の源となるのです。同じく政治共同体は、文化や経済成長といった面ではそれぞれ正当に差を有していても、「相互の進歩に対して」（同 88〔同 49〕）、すべての人の善益のために働く責務へと招かれています。

実際、より正義にかなう安全な社会を築きたいと真に望むならば、武器を手放さなければなりません。「武器を手にしたまま、愛することはできません」（聖パウロ 6 世「国連でのスピーチ（1965 年 10 月 4 日）」10）。武力の論理に屈して対話から遠ざかってしまえば、いっそうの犠牲者と廃墟を生み出すことが分かっているながら、武力が悪夢を

もたらすことを忘れてしまうのです。武力は「膨大な出費を要し、連帯を押し進める企画や有益な作業計画が滞り、民の心理を台なしにします」（同）。紛争の正当な解決策として、核戦争の脅威による威嚇をちらつかせながら、どうして平和を提案できるでしょうか。この底知れぬ苦しみが、決して越えてはならない一線を自覚させてくれますように。真の平和とは、非武装の平和以外にありえません。それに、「平和は単に戦争がないことでもな〔く〕、……たえず建設されるべきもの」（第二バチカン公会議『現代世界憲章』78）です。それは正義の結果であり、発展の結果、連帯の結果であり、わたしたちの共通の家の世話の結果、共通善を促進した結果生まれるものなのです。わたしたちは歴史から学ばなければなりません。

思い出し、ともに歩み、守ること。この三つは、倫理的命令です。これらは、まさにここ広島において、よりいっそう強く、より普遍的な意味をもちます。この三つには、平和となる道を切り開く力があります。したがって、現在と将来の世代が、ここで起きた出来事を忘れるようなことがあってはなりません。記憶は、より正義にかない、いっそう兄弟愛にあふれる将来を築くための、保証であり起爆剤なのです。すべての人の良心を目覚めさせられる、広がる力のある記憶です。わけても国々の運命に対し、今、特別な役割を負っているかたがたの良心に訴えるはずです。これからの世代に向かって、言い続ける助けとなる記憶です。二度と繰り返しません、と。

だからこそわたしたちは、ともに歩むよう求められているのです。理解とゆるしのまなざしで、希望の地平を切り開き、現代の空を覆うおびただしい黒雲の中に、一条の光をもたらすのです。希望に心を開きましょう。和解と平和の道具となりましょう。それは、わたしたちが互いを大切に、運命共同体で結ばれていると知るなら、いつでも実現可能です。現代世界は、グローバル化で結ばれているだけでなく、共通の大地によっても、いつも相互に結ばれています。共通の未来を確実に安全なものとするために、責任をもって闘う偉大な人となるよう、それぞれのグループや集団が排他的利益を後回しにすることが、かつてないほど求められています。

神に向かい、すべての善意の人に向かい、一つの願いとして、原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によって、心から声を合わせて叫びましょう。戦争はもういない！ 兵器の轟音はもういない！ こんな苦しみはもういない！ と。わたしたちの時代に、わたしたちのいるこの世界に、平和が来ますように。神よ、あなたは約束してくださいました。「いつくしみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」（詩編 85・11-12）。

主よ、急いで来てください。破壊があふれた場所に、今とは違う歴史を描き実現する希望があふれますように。平和の君である主よ、来てください。わたしたちをあなたの平和の道具、あなたの平和を響かせるものとしてください！

「わたしはいおう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』」（詩編 122・8）。

★三重災害被災者との集まり教皇講話

ベルサール半蔵門

2019年11月25日、東京

愛する友人の皆さん。

皆さんとのこの集いは、わたしの日本訪問中の大切なひとときです。アルゼンチンの音楽で迎えてくださりありがとうございます。とくに敏子さん、徳雲さん、全生さんに感謝します。それぞれのこれまでの歩みをわたしたちと分かち合ってください、ありがとうございます。この3名のかた、そして皆さんは、三重災害、つまり地震、津波、原発事故によって言い表せないほどの本当に辛い思いをされた、すべての人を代表しておられます。災害は、岩手県、宮城県、福島県だけでなく、日本全土と全国民に影響を及ぼしました。ご自分のことばと姿で、大勢の人が被った悲しみと痛みを、そして、よりよい未来に広がる希望を伝えてくださり、ありがとうございます。全生さんはご自分の証言を終える際に、わたしに皆さんの祈りに加わってほしいと招いてくださいました。しばらく沈黙の時間を取り、最初のことばとして、1万8千人にも上る亡くなられたかた、ご遺族、いまだ行方の分からないかたのために祈りましょう。わたしたちを一つにし、希望をもって前を見る勇気を与えてくれる祈りをしましょう。

地方自治体、諸団体、人々の尽力にも感謝します。皆さんは、災害地域の復興に取り組み、また、現在も仮設住宅に避難して自宅に帰ることができずにいる、5万以上もの人の境遇改善に努めておられます。

とくに感謝したいのは、敏子さんが的確に指摘されたように、日本だけでなく世界中の多くの人が、災害直後に迅速に動いてくれたことです。祈りと物資や財政援助で、被災者を支えてくれました。そのような行動は、時間が経てばなくなるものや、最初の衝撃が薄れれば衰えていくものであってはなりません。むしろ、長く継続させなければなりません。全生さんの指摘についていえば、被災地の住人の中には、今はもう忘れられてしまったと感じている人もいます。汚染された田畑や森林、放射線の長期的な影響などで、継続的な問題を突きつけられている人も少なくありません。

この集いが、集まった全員によって、この惨劇を被った被災者のかたがたが引き続き多くの必要な助けを得るための、心あるすべての人に訴える呼びかけとなりますように。

食料、衣服、安全な場所といった必需品がなければ、尊厳ある生活を送ることはできません。生活再建を果たすには最低限必要なものがあり、そのために地域コミュニティの支援と援助を受ける必要があるのです。一人で「復興」できる人はどこにもいません。だれも一人では再出発できません。町の復興を助ける人だけでなく、展望と希望を回復させてくれる友人や兄弟姉妹との出会いが不可欠です。敏子さんは津波で家を失いましたが、いのちが助かったことをありがたいと思い、助け合うために団結する人を見て希望をもっていると話してくれました。三重災害から8年、日本は、連帯し、根気強く、

粘り強く、不屈さをもって、一致団結できる人々であることを示してきました。完全な復興まで先は長いかもしれませんが、しかし、助け合い、頼り合うために一致できるこの国の人々の魂をもってすれば、必ず果たすことができます。敏子さんがいわれたように、何もしなければ結果はゼロですが、一歩踏み出せば一歩前に進みます。ですから皆さん、毎日少しずつでも、前に進んでいくよう励まします。連帯と献身に基づく未来を築くための一歩です。だれかのため、皆さんのため、皆さんの子どもや孫のため、そしてこれから生まれてくる次の世代のためです。

徳雲さんは、わたしたちに影響する別の重要な問題に、どのようにこたえうるかを尋ねられました。ご存じのとおり、戦争、難民、食料、経済格差、環境問題は、切り離して判断したり対処したりはできません。今日、問題を強大なネットワークの一部とみなすことなく、個々別々に扱えると考えるのは大きな間違いです。的確に指摘して下さったように、わたしたちはこの地球の一部であり、環境の一部です。究極的には、すべてが互いに絡み合っているからです。思うに最初の一步は、天然資源の使用に関して、そしてとくに将来のエネルギー源に関して、勇気ある重大な決断をすることです。無関心と闘う力のある文化を作っていくために、働き、歩むことです。わたしたちにもっとも影響する悪の一つは、無関心の文化です。家族の一人が苦しめば家族全員がともに苦しむという自覚をもてるよう、力を合わせるものが急務です。課題と解決を包括的に受け止め、きずなという知恵が培われないかぎり、互いの交わりはかないません。わたしたちは、互いにつながっているのです。

この意味で特別に思い起こしたいのが、福島第一原子力発電所の事故とその余波です。科学的・医学的な懸念に加えて、社会構造を回復するという、途方もない作業もあります。地域社会で社会のつながりが再び築かれ、人々がまた安全で安定した生活ができるようにならなければ、福島事故は完全には解決されません。これが意味するのは、わたしの兄弟である日本の司教たちがいみじくも指摘した、原子力の継続的な使用に対する懸念であり、司教たちは原子力発電所の廃止を求めました。

この時代は、技術の進歩を人間の進歩の尺度にしたいという誘惑を受けています。進歩と発展のこの「技術主義（テクノクラティックパラダイム）」は、人々の生活と社会の仕組みを形成します。そしてそれは、しばしばわたしたちの社会のあらゆる領域に影響を与える還元主義につながります（回勅『ラウダート・シ』101-114参照）。したがって、このようなときには、立ち止まり、じっくり考え、振り返ってみることが大切です。わたしたちは何者なのか、そしてできればより批判的に、どのような者になりたいのかを省みるのが大事なのです。わたしたちの後に生まれる人々に、どのような世界を残したいですか。何を遺産としたいですか。お年寄りの知恵と経験が、若い人の熱意とやる気とともに、異なるまなざしを培う助けとなってくれます。いのちという贈り物を尊ぶ助けとなるまなざしです。さらに、ユニークで、多民族、多文化である人類家族として、わたしたちの兄弟姉妹との連帯を培うことも助けてくれるのです。

わたしたちの共通の家の未来について考えるなら、ただただ利己的な決断は下せないこと、わたしたちには未来の世代に対して大きな責任があることに気づかなければなりません。その意味でわたしたちは、控えめで慎ましい生き方を選択することが求められています。それは、向き合うべき緊急事態に気づく生き方です。敏子さん、徳雲さん、全生さんは、未来のための新たな道を見つける必要をわたしたちに思い出させてくれました。一人ひとりを大切に、そして自然界を大切にする心に基づく道です。この道において「わたしたちは皆、神の道具として、被造物を世話するために、おのおの自身の文化や経験、自発性や才能に応じた協力ができるのです」（同 14）。

愛する兄弟姉妹の皆さん。三重災害後の復興と再建の継続的な仕事においては、多くの手と多くの心を、あたかも一つであるかのように一致させなければなりません。こうして、苦しむ被災者は助けを得て、自分たちが忘れられていないと知るはずです。多くの方が、実際に、確実に、被災者の痛みをともに担っていると、兄弟として助けるために手を差し伸べ続けると知るでしょう。あらためて、大げさにではなく飾らない姿勢で、被災者の重荷を和らげようと尽くしたすべての皆さんに、賛美と感謝を申し上げます。そのような思いやりが、すべての人が未来に希望と安定と安心を得るための、歩むべき道のりとなりますように。

ここにお集まりいただきましたことに、あらためて感謝いたします。わたしのために祈ってください。神様があなたと、あなたの愛する人すべてに、知恵と力と平和という祝福を与えてくださいますように。ありがとうございました。

★2019年11月25日月曜日、本日はこちらの集いに

東日本大震災及び福島第一原発事故被災者としてご招待頂き参列させていただきました。

フランシスコ教皇のお話は被災者3人のお話をしっかりと受け止めてのお話で大変感銘を受けました。

福島原発避難者として代表スピーチをされた17歳の鴨下全生さんの素晴らしいスピーチ全文を是非多くの皆さまにも共有しともに歩んで頂きたいと思っております。

【鴨下全生さんスピーチ全文】

親愛なるパパ様

僕は福島県いわき市に生まれました。8歳のときに原発事故が起きて、被曝を逃れるために東京に避難しました。でも父は、母に僕らを託して、福島へ戻りました。父は教師で、僕らの他にも守るべき生徒たちがいたからです。母は、僕と3歳の弟を連れて、慣れぬ地を転々としながら避難を続けました。弟は布団にもぐって泣きました。僕

は避難先でいじめにも遭い、死にたいと思う程つらい日々が続きました。やがて父も、心と体がボロボロになり、仕事をやめました。それでも避難できた僕らは、まだ幸せなのだと思います。

国は、避難住宅の提供さえも打ち切りました。僕は必死に残留しているけど、多くの人やむなく汚染した土地に戻って行きました。でも広く東日本に降り注いだ放射性物質は、8年経った今も放射線を放っています。汚染された大地や森が元通りになるには、僕の寿命の何倍もの歳月が必要です。だからそこで生きていく僕たちに、大人達は、汚染も被曝も、これから起きる可能性のある被害も、隠さず伝える責任があると思います。嘘をついたまま、認めないまま、先に死なないで欲しいのです。

原発は国策です。そのためそれを維持したい政府によって、賠償額や避難区域の線引きが決められ、被害者の間に分断が生じました。傷ついた人同士が、互いに隣人を憎み合うように仕向けられてしまいました。

僕たちの苦しみは、とても伝えきれません。

だから教皇様、どうか共に祈ってください。僕たちが互いの痛みに気付き、再び隣人を愛せるように。残酷な現実であっても、目を背けない勇気が与えられるように。力を持つ人たちに、悔い改めの勇気が与えられる様に。皆でこの被害を乗り越えていけるように。

そして、僕らの未来から被曝の脅威をなくすため、世界中の人が動き出せる様に、どうか共に祈って下さい。

※鴨下全生さんは2019年3月にもバチカでフランシスコ教皇と謁見され原発被災者の思いをお伝えされています。

今回は半年ぶりの再会となりましたが、スピーチ終了後、歩み寄られた教皇の方から覚えておられますか？と尋ねられハグされたこともまた、福島核被災者ととともにずっとあるとのメッセージがよく伝わり、とても感動しました！

★東京ドーム教皇説教

2019年11月25日、東京

今聞いた福音は、イエスの最初の長い説教の一節です。「山上の説教」と呼ばれているもので、わたしたちが歩むよう招かれている道の美しさを説いています。聖書によれば、山は、神がご自身を明かされ、ご自身を知らしめる場所です。神はモーセに、「わたしのもとへ登りなさい」（出エジプト24・1参照）と仰せになりました。その山頂には、主意主義によっても、「出世主義」によっても到達できません。分かれ道において師なるかたに、注意深く、忍耐をもって丁寧に聞くことによつてのみ、山頂に到達でき

るのです。山頂は平らになり、周りがすべて見渡せるようになり、そこはたえず新たな展望を、御父のいつくしみを中心とする展望を与えてくれるのです。イエスにこそ、人間とは何かの極みがあり、わたしたちの考えをことごとく凌駕する充満に至る道が示されています。イエスにおいて、神に愛されている子どもの自由を味わう新しいのちを見いだすのです。

しかし、わたしたちはこの道において、子としての自由が窒息し弱まるときがあることを知っています。それは、不安と競争心という悪循環に陥るときです。息も切れるほど熱狂的に生産性と消費を追い求めることに、自分の関心や全エネルギーを注ぐときです。まるでそれが、自分の選択の評価と判断の、また自分は何者か、自分の価値はどれほどかを定めるための、唯一の基準であるかのようにです。そのような判断基準は、大切なことに対して徐々にわたしたちを無関心、無感覚にし、心を表面的ではかないことながらへと向かうよう押しやるのです。何でも生産でき、すべてを支配でき、すべてを操れると思ひ込む熱狂が、どれほど心を抑圧し、縛りつけることでしょう。

ここ日本は、経済的には高度に発展した社会です。今朝の青年との集いで、社会的に孤立している人が少なくないこと、いのちの意味が分からず、自分の存在の意味を見いだせず、社会の隅にいる人が、決して少なくないことに気づかされました。家庭、学校、共同体は、一人ひとりが支え合い、また、他者を支える場であるべきなのに、利益と効率を追い求める過剰な競争によって、ますます損なわれています。多くの人が、当惑し不安を感じています。過剰な要求や、平和と安定を奪う数々の不安によって打ちのめされているのです。

かづける香油のごとく、主のことばが鳴り響きます。思い煩うことなく、信頼しなさい、と。主は三度にわたって繰り返して仰せになります。自分のいのちのことで思い悩むな、……明日のことまで思い悩むな（マタイ 6・25、31、34 参照）。これは、周りで起きていることに関心をもつなとっているのでも、自分の務めや日々の責任に対していい加減でいなさいとっているのでもありません。それよりも、意味のあるより広い展望に心を開くことを優先して、そこに主と同じ方向に目を向けるための余地を作りなさいという励ましなのです。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」（マタイ 6・33）。

主は、食料や衣服といった必需品が大切でないとおっしゃっているのではありません。それよりも、わたしたちの日々の選択について振り返るよう招いておられるのです。何としてでも成功を、しかもいのちをかけてまで成功を追求することにとらわれ、孤立してしまわないようにです。世俗の姿勢はこの世での己の利益や利潤のみを追い求めます。利己主義は個人の幸せを主張しますが、実は、巧妙にわたしたちを不幸にし、奴隷にします。そのうえ、真に調和のある人間的な社会の発展をはばむのです。

孤立し、閉ざされ、息ができずにいるわたしに抗しうるものは、分かち合い、祝い合い、交わるわたしたち、これしかありません（「一般謁見講話（2019年2月13日）」

参照)。主のこの招きは、わたしたちに次のことを思い出させてくれます。「必要なのは、『わたしたちの現実は与えられたものであり、この自由さえも恵みとして受け取ったものだ』ということ、歓喜のうちに認めることです。それは今日の、自分のものは自力で獲得するとか、自らの発意と自由意志の結果だと思込む世界では難しいことです』」（使徒的勧告『喜びに喜べ』55）。それゆえ、第一朗読において、聖書はわたしたちに思い起こさせます。いのちと美に満ちているこの世界は、何よりも、わたしたちに先立って存在される創造主からのすばらしい贈り物であることを。「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それはきわめてよかった」（創世記1・31）。与えられた美と善は、それを分かち合い、他者に差し出すためのものです。わたしたちはこの世界の主人でも所有者でもなく、あの創造的な夢にあずかる者なのです。「わたしたちが、自分たち自身のいのちを真に気遣い、自然とのかかわりをも真に気遣うことは、友愛、正義、他者への誠実と不可分の関係にある」（回勅『ラウダート・シ』70）のです。

この現実を前に、キリスト者の共同体として、わたしたちは、すべてのいのちを守り、あかしするよう招かれています。知恵と勇気をもって、無償性と思いやり、寛大さとすなおに耳を傾ける姿勢、それらに特徴づけられるあかしです。それは、実際に目前にあるいのちを、抱擁し、受け入れる態度です。「そこにあるもろさ、さもしさをそっくりそのまま、そして少なからず見られる、矛盾やくだらなさをもすべてそのまま」（「ワールドユースデーパナマ大会の前晩の祈りでの講話（2019年1月26日）」）引き受けるのです。わたしたちは、この教えを推し進める共同体となるよう招かれています。つまり、「完全でもなく、純粹でも洗練されていなくても、愛をかけるに値しないと思っただとしても、まるごとすべてを受け入れるのです。障害をもつ人や弱い人は、愛するに値しないのですか。よそから来た人、間違いを犯した人、病気の人、牢にいる人は、愛するに値しないのですか。イエスは、重い皮膚病の人、目の見えない人、からだの不自由な人を抱きしめました。ファリサイ派の人や罪人をその腕で包んでくださいました。十字架にかけられた盗人すらも腕に抱き、ご自分を十字架刑に処した人々さえもゆるされたのです」（同）。

いのちの福音を告げるということは、共同体としてわたしたちを駆り立て、わたしたちに強く求めます。それは、傷のいやしと、和解とゆるしの道を、つねに差し出す準備のある、野戦病院となることです。キリスト者にとって、個々の人や状況を判断する唯一有効な基準は、神がご自分のすべての子どもたちに示しておられる、いつくしみという基準です。

善意あるすべての人と、また、異なる宗教を信じる人々と、絶えざる協力と対話を重ねつつ、主に結ばれるならば、わたしたちは、すべてのいのちを、よりいっそう守り世話を、社会の預言的パン種となれるでしょう。

★政府および外交団との懇談

2019年11月25日、首相官邸大ホール

内閣総理大臣閣下、
政府高官の皆様、
外交団の皆様、
お集まりの皆様、

まず総理大臣閣下の歓迎のおことばに感謝申し上げます。そして政府高官の皆様と外交団の皆様に、謹んでごあいさつ申し上げます。皆様はそれぞれのお立場において、平和のために、そしてこの崇高な日本という国の人々、および皆様が代表される国々の民の発展のために尽力されていらっしゃいます。わたしは今朝天皇陛下にお会いできたことに大変感謝しております。この新しい（令和という）時代の始まりにあたって、天皇陛下のこれからのご活躍を願い、皇族の皆様、とりわけすべての日本国民に、神の祝福をお祈りします。

バチカン市国と日本の友好関係の歴史は古く、貴国を最初に訪れた宣教師たちが日本に対して抱いた認識と賞賛に根ざすものです。1579年にイエズス会士のアレッシンドロ・ヴァリニャーノが書き残した「わたしたちの神が人間に何を与えたかを見なければ、日本に来て、見ればよい」ということばを思い起こすだけで十分です。歴史的に両国間の交流の機会が多く、その関係を深めてきた文化的、外交的使節の往来があったおかげで、大きな緊張や困難も乗り越えることができたのです。このような交流は両国にとって、政府レベルにおいても有益なものとなりました。

わたしは、日本のカトリック信者の信仰をさらに揺るぎないものとするために来ました。貧しい人に対する愛のわざを、また国民であることに誇りをもつ国に尽くす姿を確認しました。国家として日本は、不遇にある人や障害をもつ人の苦悩に対しとりわけ敏感です。今回の訪問のテーマは、「すべてのいのちを守るため」です。これは、すべてのいのちがもつ不可侵の尊厳と、あらゆる苦難の中にいる兄弟姉妹に連帯と支援を示すことの大切さを認識するということです。これに関し衝撃を受けたのは、（東日本大震災で）三重の災害に遭われたかたがたのお話をうかがったときでした。被災者の皆様が大変な経験をされ、それによって今も困難な状況におられることに深く心を痛めています。

前任の教皇たちの足跡に従って、神に切に願うとともに、すべての善意ある人に呼びかけます。人類の歴史において、広島と長崎に投下された原爆によってもたらされた破壊が二度と繰り返されないよう、阻止するために必要なあらゆる仲介を推し進めてください。民族間、国家間の紛争は、そのもっとも深刻なケースにおいてさえ、対話によってのみ有効な解決を見いだせること、そして対話こそ、人間にとって唯一ふさわしく、恒久的平和を保証しうる手段だということを歴史は教えています。核の問題は、多国間

のレベルで取り組むべきものだ」と確信しています。すなわち、政治的・制度的プロセスを促進することで、コンセンサスとより広範な国際的行動を創造することができるからです。

出会いと対話の文化——これは見識と展望と広い視野があって成り立つものです——こそが、より正義と友愛に満ちた世界を建設するために重要なのです。日本は、教育、文化、スポーツ、観光の分野において、人と人との交流を促進する重要性を理解してきました。それが、平和という建物を強固にする、調和、正義、連帯、和解に大いに貢献することをご存じだからです。その際立った例を、オリンピックの精神に見ることができます。世界中からアスリートが競技に参加しますが、それは、敵対心ではなく、最高のパフォーマンスの追求に基づいてのことです。わたしは来年日本で開催されるオリンピックとパラリンピックが、国や地域を越えて、家族であるわたしたち人類全体の幸せを求め、連帯の精神をはぐくむ推進力になると確信しています。

この数日間に、何世紀にもわたる歴史の中ではぐくまれ、大切にされてきた日本のすばらしい文化遺産と、日本古来の文化を特徴づける宗教的、倫理的な優れた価値に、あらためて感銘を受けました。異なる宗教間のよい関係は、平和な未来のために不可欠だけでなく、現在と未来の世代が、真に公正で人間らしい社会の基盤となる道德規範の大切さを認められるよう導くために重要なのです。今年2月にアル＝アズハルの大イマームとともに署名した「世界平和と共存のための人類の友愛に関する文書」の中でわたしたちは、家族である人類の将来のために共有する課題に促され、「対話の文化を、とるべき態度として協働を、方法・基準として相互認識を採択」しました。

日本を訪れる人はだれしも、この国の自然の美しさに感嘆します。この自然の美しさは、何世紀もの間、詩人や芸術家によって表現され、とくに桜の花の姿に象徴されてきました。しかしながら、桜の花のはかなさに、わたしたちの共通の家である地球の脆弱さも想起するのです。地球は自然災害だけでなく、人間の手によって貪欲に搾取されることによっても破壊されているのです。国際社会が被造物を守る使命を果たすのは困難だとみなすとき、ますます声を上げ、勇気ある決断を迫るのは若者たちです。若者たちは、地球を搾取のための所有物としてではなく、次の世代に手渡すべき貴重な遺産として見るよう、わたしたちに迫るのです。わたしたちは「彼らに対し、むなしいことばではなく、誠実にこたえなければなりません。まやかしではなく、事実によって、こたえるのです」（2019年「被造物を大切にする世界祈願日」教皇メッセージ2）。

この点において、わたしたちの地球を保全するための統合的アプローチは、ヒューマン・エコロジーをも考慮しなければなりません。保全のための責任ある取り組みは、広がりつつある貧富の格差、すなわちグローバルな経済システムにおいて、特権的なごく少数の人が甚だしい富に浴している一方で、世界の大半の人は貧困にあえいでいる、という事実に向かい向かうことを意味します。これについて、日本政府がさまざまなプログラムを促進しておられることを存じております。国家間の協働責任の意識を高める啓発

を続けてくださるよう励まします。人間の尊厳は、社会的、経済的、政治的活動、それらすべての中心になければなりません。世代間の連帯を促進する必要があり、社会生活においてどんな立場にあっても、忘れられ、排除されている人々に思いを寄せなければなりません。わたしは、とくに若者たちのことを考えます。彼らは成長過程でのさまざまな困難に直面して、押しつぶされそうに感じてしまうことも少なくありません。同様に、高齢者や、孤独に苦しむ孤立した人のことも考えます。結局のところ、各国、各民族の文明というものは、その経済力によってではなく、困窮する人にどれだけ心を砕いているか、そして、いのちをはぐくみ豊かにする能力があるかによって測られるものなのです。

訪日が終わろうとする今、今回ご招待を受けたことに、そして心からのおもてなしを受けたことに、またこのおもてなしがうまく運ぶように尽力して下さったすべてのかたがたの寛容さに、あらためて感謝いたします。このような思いをお伝えすることで、これから皆様の努力によって、よりいっそう生命を守り、人類家族すべての尊厳と権利をいっそう尊重する社会秩序が形成されますよう、応援したいと思います。皆様と皆様のご家族、そして国民の皆様に対し、神の祝福が豊かにありますよう祈ります。

ありがとうございます。

★上智大学訪問教皇講話

2019年11月26日、東京

愛する兄弟姉妹の皆さん。

わたしの教皇としての日本司牧訪問の最後に、貴国を発ってローマに戻る前の少しの時間を皆さんとともに過ごせることを大変うれしく思います。

この国での滞在は短いものでしたが、大変密度の濃いものでした。神と、日本のすべての人々に、この国を訪れる機会をいただいたことを感謝します。日本は、聖フランシスコ・ザビエルの人生に多大な影響を与えた国であり、多くの殉教者がキリスト教信仰をあかした国です。キリスト教信者は少数派ですが、存在感があります。わたし自身、カトリック教会に対して一般市民がもつ好意的評価を目にしましたが、こうした互いの敬意が、将来において深まっていくことを期待します。また、日本社会は効率性と秩序によって特徴づけられていますが、一方で、何かそれ以上のものを望み、探しているように見受けられます。よりいっそう人間らしく、もっと思いやりのある、もっといつくしみに満ちた社会を創り出したいという熱い望みを感じます。

学問と思索宗教的思索は、すべての文化にあるものですが、皆さんの日本文化はこの点において、長い歴史にはぐくまれた豊かな遺産として誇るべきものです。日本はアジア全体としての思想とさまざまな宗教を融合し、独自の明確なアイデンティティをもつ

文化を創り出すことができました。聖フランシスコ・ザビエルが深く感銘を受けた足利学校は、さまざまな見聞から得られる知識を吸収し伝播するという日本文化の力を示す好例です。学問、思索宗教的思索、研究にあたる教育機関は、現代文化においても重要な役割を果たし続けています。それゆえ、よりよい未来のために、その自主性と自由を保ち続けることが必要です。大学が未来の指導者を教育する中心的な場であり続けるとしたら、そこでは、及ぶかぎり広い範囲における知識と文化が、教育機関のあらゆる側面が、いっそう包摂的で、機会と社会進出の可能性を創出するものになるような着想を与えるものでなければなりません。

ソフィア（上智）。人間は自らの資質を建設的かつ効率的に管理する営むために、真のソフィア、真の叡智なるものをつねに必要としてきました。あまりにも競争と技術革新に方向づけられた社会において、この大学は単に知的教育の場であるだけでなく、よりよい社会と希望にあふれた未来を形成していくための場となるべきです。そして、回勅『ラウダート・シ』の精神で、自然への愛についても加えたいと思います。自然への愛は、アジアの文化に特徴的なものです。ここに、わたしたちの共通の家である地球の保護に向けられる、知的かつ先見的な懸念を表現すべきでしょう。その懸念は、技術主義（テクノクラティックパラダイム）の一部である還元主義的な企て全体を掘り下げ、疑問視できる、新たなエピステーメー思考体系の促進発展と結びつきうるものです（同106-114参照）。見失わないでください。「真正な人間性は、閉じた扉の下からそっと入り込む霧のようにほとんど気づかれないながらも、新たな総合へと招きつつ、テクノロジー文化のただ中に住まっているようです。真正なものの粘り強い抵抗が生まれるのですから、いろいろなことがあったとしても、期待し続けることはできるのではないのでしょうか」（同112）。

上智大学はつねにヒューマニズム的人間をたいせつにする（あるいは人文的）、キリスト教的、国際的というアイデンティティによって知られてきました。創立当初から、さまざまな国の出身の教師の存在によって豊かにされてきました。時には対立関係にある国々からの出身者さえいました。しかしながら、すべての教師たちが、日本の若者たちに最高のものを与えたいという願いによって結ばれていたのです。まさにこれと同じ精神が、皆さんが日本と国外で、もっとも困っている人々を支援しているさまざまなかたちの中に脈々と続いています。皆さんの大学のアイデンティティのこのような側面がいっそう強化され、今日のテクノロジーの大いなる進歩が、より人間的かつより公正で正義に即した、環境に責任ある教育に役立つものとなると確信しています。上智大学が礎を置く聖イグナチオの伝統に基づき、教員と学生が等しく思索と識別の力を深めていく環境を作り出すよう、推進していかなければなりません。この大学の学生の中に、何が最善なのかということ意識的に理解したうえで、責任をもって自由に選択するすべを習得せずに卒業する人がいてはなりません。それぞれの状況において、たとえそれがどんなに複雑なものであったとしても、己の行動においては、公正で人間的であり、手

本となるような責任あることに関心をもつ者となってください。そして、決然と弱者を擁護する者と、ことばと行動が偽りや欺瞞であることが少なくないこの時代にあって、まさに必要とされるそうした誠実さにおいて知られる者となってください。

イエズス会が計画した「使徒の世界的優先課題」「普遍的使徒的優先課題」は、若者に寄り添うことが、世界中で重要な現実であることを明確にし、イエズス会のすべての教育機関が、こうした同伴を促進すべきとしています。若者をテーマとしたシノドス（世界代表司教会議）と関連文書が示しているように、教会全体が、世界中の若者たちを、希望と関心をもって見つめています。皆さんの大学全体で、若者たちが単に準備された教育の受け手となるのではなく、若者たち自身もその教育の一翼を担い、自分たちのアイデアを提供し、未来のための展望や希望を分かち合うことに注力すべきです。皆さんの大学が、このような相互のやり取りのモデルを示し、そこから生み出される豊かさと活力によって知られる存在となりますように。

上智大学のキリスト教とヒューマニズムの人間をたいせつにする（あるいは人文的）伝統は、すでに述べたもう一つの優先事項と完全に一致します。すなわち、現代世界において貧しい人や隅に追いやられた人とともに歩むことです。自らの使命に基軸を置く上智大学は、社会的にも文化的にも異なると考えられているものをつなぎ合わせる場となることにつねに開かれているべきです。そうすれば、格差を縮め、隔たりを減らすことに寄与する教育スタイル方法を推進しうる状況を追求しつつ、隅に追いやられた人々が大学のカリキュラムに創造的に巻き込まれ、組み入れられるでしょう。良質な質の高い大学での勉学は、ごく少数の人の特権とされるのではなく、公正と共通善に奉仕する者という自覚がそこに伴われるべきです。それは、各自が働くよう課された分野で、めいめいが果たす奉仕なのです。わたしたち全員にとっての大義であり、ペトロがパウロに与えた今日でも明白な助言です。「貧しい人たちのことを忘れてはいけません」（ガラテヤ 2・10 参照）。

上智大学の愛する若者、愛する教員、愛する職員の皆さん。このようなわたしの考えと、今日のわたしたちの集いが、皆さんの人生とこの学びやの今後において実を結びますように。主なる神とその教会は、皆さんが神の叡智を求め、見だし、広め、今日の社会に喜びと希望をもたらす、その使命に加わるよう期待しています。どうぞ、わたしのため、そしてわたしたちの助けを必要としているすべての人のために、祈ることを忘れないでください。

最後に、いよいよこうして日本を離れるに際し、皆さんに感謝します。そして皆さんを通して、すべての日本人に、わたしの訪問中にくださった心のもった温かい歓迎に感謝いたします。わたしの胸の中に、祈りの中に、皆さんがおられることを約束します。